

H・R・ウイリアムスン博士著

『宋代支那の政治家教育家王安石』

Wang An-shih, A Chinese Statesman and Educationalist of the Sung Dynasty. By H. R. Williamson (London: Arther Probstain)

一九三五年及び一九三七年、この二ヶ年にウイリアムスン博士がものにした王安石に關する注目すべき研究、その第三卷(王安石の文學的作品と隨筆集)を除いて、第一卷(一九三五年)、第二卷(一九三七年)とを簡單に紹介した。

第一卷は王安石の一代記であつて、第一章王安石の祖先、第二章彼の青年時代、續く數章は地方の一下級官吏としての時代、そしてそのうちの一章には所謂萬言書(實際の字數は八千五百六十五であるが)を紹介しやがて彼が神宗に拔擢され新法を反對裡に實施する經過を冷靜に取扱ひ、詳細なる改革案の内容紹介の後、彼の失格と引退生活に於ける王安石(第二十五章)、次いで王安石の死(第二十六章)で終つてゐる。

第二卷は王安石死後の新法の發展と經過のアウトラ

イン、——北宋時代の終焉に至る——であつて、この中には王安石の性格や新法の研究、それに對する當時の批判、そして宋代歴史の動きを記述してゐる。

第一卷は靜的であり、列傳風であるに對し第二卷は北宋と言ふ時代を把握せんとしてゐる點、動的であり歴史的であると言つてよからう。少くとも第二卷に於て著者はさう努めるべく苦心してゐる。併しこれが成功してゐるかどうかは暫く措いて、二卷合せて八百頁に垂々とするウイリアムスンの勞作は、困難なる漢文の資料を相當讀みこなしてゐる點先づ敬意を表さざるを得ない。從來少數の然も極めて簡單なる王安石が歐人の手に依つてなされてゐるに過ぎず、我が國に於ても纏つて研究書あるを聞かざるとき、ウ博士が、たとへそれが、次に述べるが如き弱點と短所とを藏してゐるとは言へ、支那史上ユニークな存在である王安石を取上げ解剖し批判せんとする學問的熱意と努力とには我々も學ぶべきものがあると思ふ。

「本書の弱點と短所」は先づ第一に本書が内容と外形とに於て結局、支那歴史家の著した王安石評傳の英譯以外の何物でもないと言ふ點にある。換言すれば歐米

人にとつては啓蒙的ではあつても、我々宋代或は王安石の研究家には餘り参考にすべきものが少いと言ふ事である。

本書は蔡元鳳(上翔)の王荊公年譜考略を多く参照したと考へられる。彼の参考した漢文資料として王臨川全集、通鑑、宋史、陔餘叢考、續資治通鑑綱目、御批通鑑輯覽、舊唐書、四庫全書提要、文獻通考、宋文鑑、朱子全書、名臣言行錄、周官新義等が擧げられるけれども。従つて王安石に對する目新しい新説もなく示唆にも乏しい。唯、第二卷第十四章に於て王安石の「貨幣政策、銅輸出禁止の解除」(「The Coinage, Lifting of Embargo on Copper, etc.」)なる一章を設け、王安石の諸政策中謎とされてゐる銅禁撤廢の理由と根據を探らんとしてゐるのであるが、これは著者の炯眼の非凡さを現はすものとして興味深い。

次に著者が第二卷に於て爲さんと努力した北宋時代の歴史的把握が貧弱であると言ふ事、其處に我々の重

大なる不滿と物足りなさが感じられるのである。即ちウイリアムスン博士は刻明に、王安石なる人物とその政策とを歐洲に於て紹介の勞をとつたと言ふに止まるのであつて、そこに歴史學徒を満足せしむるだけの積極性を多く見出し得ないことを遺憾とするのである。北宋の社會と政治と經濟的狀態の正しき把握と理解なくしては到底王安石の正しき分析や記述の不可能なるは議論の餘地なき常識である。また上記の根本資料の外、宋代の文獻には見るべきものが多い。

私自身としては第二卷第十四章以外に大して興味を感じた箇所はなく、平凡なる王安石の列傳風英譯書とでも言ふべきであるが、併しウイツトフオーゲル氏が批評せる如く「それは非常によく考證された資料を含んでをり、その大部分は支那語からはじめて翻譯されたものである」點一面大いに推奨すべきものがあると思ふ。「荒木敏一」